



平成28年12月発行 発行所 砺波カイニヨ倶楽部 代表幹事 出村 忍
事務局 富山県砺波市表町 14-10 電話 0763-33-6588 天野一男建築工房内

安曇野から砺波の屋敷林を見学に

長野県安曇野市から場々洋介リーダー率いる『屋敷林と歴史的まちなみプロジェクト』チーム15名が9月22～23日、五箇山の合掌づくりと砺波市の屋敷林視察にバスで訪れました。その際、当倶楽部から出村代表と柏樹直樹氏・高畑邦男氏が案内・説明を行った。

初日は、五箇山の岩瀬家・菅沼合掌集落を見学後、国道304号を城端より砺波へ向かう途中、出村代表がバスに乗りし車中にて散居村等の説明をした。あいにく天候が悪く散居村は見えなかった。砺波では、散居村ミュージアムと四季彩館を視察。

夜は参加者と倶楽部会員4名が加わり親睦会をコスモス荘にて行った。

2日目は、鉢伏山中腹から散居村を眺めた後、岡本晃一宅と高田隼水宅のカイニヨを見学した。両宅とも航空写真が準備なされ、岡本宅では、平成16年(台風23号)の倒木後(現在の様子)と倒木前の状況を比較することが出来た。

高田宅では、昭和37年頃の圃場整備前の写真を基に、現在と整備前との比較説明で、家の位置が変わっていないがカイニヨは少なくなったことが、はっきりわかった。

食事後、安曇野一行より「新藤正夫氏に是非お会いしたい」との要望で新藤宅を訪問した後、帰路に着かれ、翌日、当倶楽部事務局へお礼の連絡があった。

一安曇野の参加者からの感想一

1. 安曇野市の景観とは、規模が違い素晴らしい。
2. これほど大規模な散居景観を、大事に守ってほしい
3. 砺波市は、多少なりとも補助があり、うらやましい。
4. カイニヨの世話は、大変でしょう。

一当倶楽部世話方より一

1. 天候が悪いが、散居村を眺めることが出来てよかった。
2. 見学宅(2軒)では、丁寧な説明で感謝。
3. 安曇野から「当倶楽部との交流回数を増やす。毎年交互に訪問する」などの提案あり。
4. 安曇野との交流は、第1回の屋敷林シンポジウム(安曇野にて)に新藤正夫氏が出席された事がきっかけ。
5. 砺波のカイニヨのある散居村は日本一。そして、世界一です。

報告主原稿：T・K

100本のカイニヨの掃除(雨が降る 早く 早く)

10月8日(土曜日)午前中 砺波市頼成 武部由美子さん宅のカイニヨの掃除を行いました。曇りの予報でしたが10時過ぎから雨が降りだしましたが無事終える事が出来ました。参加者は8名。

スギ・ケヤキなど約100本の樹木の落ち葉等の掃除は大変な労力が必要です。作業は、落ち葉等を集積する人・それをモッコに積み込む人・運搬する人、手際良く順調に進みました。

「カイニヨは、じつとその場で家を守り続けています。夏は枝葉をのびし涼しく、雨・風・雪から家を守っています。こんなカイニヨを、もっともっと大事にしたい」武部さんは、そんな心の持ち主です。

掃除されたカイニヨは大喜びでしょう。そして、掃除の手伝いをさせて頂き私自身こんなに満足した事は、はじめてです。カイニヨへの思いが変わったよう思います。ますます、カイニヨが大好きになりました。

掃除が終わり、『イップクショウマイケ』と声があり、武部さんから『カイニヨの世話が大変になってきました。掃除してもらえて大変ありがたいです』との感謝のお言葉がありました。

一時、雨の中の掃除でしたが、すがすがしい一日でした。

●▲■『イップクショウマイケ』での話し●▲■

- ① カイニヨは、自分たちの子供であり孫である。いやいや爺ちゃん・ひい爺ちゃんかな。
- ② カイニヨは、緑の真珠。かけがえのない家族である。
- ③ カイニヨは、癒しの場を提供してくれる。
- ④ それにしても、維持管理が大変だ。もったもだ、もったもだ。
いろんな意見が沢山ありました。カイニヨは、クシャミしているかも。

●この場で、クイズが出題されました

- ・ 問題一武部さん宅には、西南の一角に松葉の数が3本の松の木がありますが、この松の種類は??
 - ・ 答え一3本葉は、大王松です。(2本葉は、黒松・赤松。5本葉は、五葉松)
- 付録解説——大王松も、何種類かあります。次回の会報にて説明します。 報告主原稿：T・K



岡本宅のカイニヨ見学



高田宅で集合写真



掃除中



掃除中

「日本における屋敷林の多様な展開」を聴いて

◇「屋敷林」探訪55,000kmの先生が語る(講演要旨)

11月19日、散居村ミュージアムにおいて、第69回砺波散村地域研究所・富山地学会合同例会が開催された。その折、郡山女子大学特任教授・九州大学名誉教授の石村眞一博士(工学)が「日本における屋敷林の多様な展開」と題して講演された。岡山市生まれ、高校教員21年の後「桶・樽の生産技術に関する研究」で東京大学工学博士、専門分野は技術史学で、九州芸術工科大学教授などを歴任し、現職。今は福島県郡山市大槻町在住。大学を退職後は、永年興味のあった屋敷林に向かい、2年半で55,000kmを車で走り回って全国の屋敷林を現地調査。撮りためた写真の一部100点ほどは、散居村ミュージアムで、前後して1週間展示された。

◇日本の屋敷林文化

屋敷林は、世界中で見られ、特に日本に限った樹木景観ではない。地域性があり、樹種・地理的条件・生活条件にも左右されて形成される。屋敷林成立要件は、防風効果だけではない。強風地域が必ずしも屋敷林を構築しているとは限らない。台風上陸が多い四国高知や紀伊半島和歌山ではほとんど見当たらない。東日本に比較して西日本には極端に少なく、形成されないことが多い。よって、防風効果が屋敷林の必須条件とすることは難しい。日陰効果;日本の夏は高温多湿。近世までは夏に体調不良になる人が多く、ケヤキのような広葉樹は日陰づくりに好適。日本の伝統的な木造建築は、夏の生活を設計思想とした。冬の寒さが厳しい東北地方でも、夏の生活を中心に設えた。この生活感は、世界でも珍しい。ただ、日本中で住宅事情は同じでも、屋敷林の日陰は西日本ではさほど発達しなかった。よって、防風効果と同様に日陰効果も必須条件とはなりにくい。そこで私は屋敷林に果樹を加える。果樹は生活に不可欠なもの。農家の前庭に果樹を植える習慣は、西日本でも東日本でも共通している。カキ、クリは代表的で全国で植えられている。縄文人はクリを主食にしており、住居の周囲にクリを栽培していたことが最近の発掘で確認された。だとすれば、屋敷林の起源は縄文時代に遡る可能性も!!東南アジア諸地域では、住宅の周囲に果樹を多く植えている。日本のように低く仕立てることはなく、高木である。子供や青年が高い木に登って果物を収穫し、果樹は日陰の役割をしている。マクロ的には、果樹が屋敷林形成のルーツではないかという指摘もできる。屋敷林の機能は複合的で、単独の機能だけでは成立していないと考える。ケヤキは日陰に役立ち、大きく育てて木材として売れる。同様にスギやヒノキも防風効果に寄与するだけでなく、育てば建築材として使用できる。大きな屋敷林では、平地植林と同じ機能を持っており、換金性がある。この複合性が、日本の屋敷林の特徴だということになる。

屋敷林の機能の中で、屋敷地の風格を示すということを見逃してはならない。この風格には、大木に象徴される立派さとともに、豊かな色彩も重要な位置を占める。サクラ・ツバキなどの花、春の新緑、秋の紅葉も好まれる。こうした美的な樹木景観は、屋敷林の持ち主だけでなく、屋敷の周囲に生活する人、屋敷の周囲を通る人にも楽しさを与える。つまり屋敷林は、生活空間に美を提供している!!それも四季折々に美を提供している。近年は、国産材の値段が安く節の多い屋敷林の木材は極めて安いのが実態。また空調設備の発達で屋敷林が放置される傾向。結果、強風で枝が折れ、住宅を痛めたり道路に落ちると極めて危険な状況になる。こうした現状を打破し、美しい樹木景観を継承するには、屋敷林の持ち主だけの努力のみでは無理!!都会では、大勢のボランティアが支えている。一部の自治体では、景観保持のために助成金を出して対応している。

今後は、すばらしい景観を持つ屋敷林を文化財に指定することを目指し、各地で屋敷林保護の動きをつくることが課題です。そのためには、屋敷林のネットワーク化が不可欠となります。…これが、講師:石村眞一先生の講演趣旨です。みなさんいかがですか?!

◇砺波の屋敷林の特性は?!

散居村ミュージアム館長の依頼で、石村先生を新藤正夫宅に案内し、砺波の感想や屋敷林に対する思いを伺った。砺波には3回は来ているが、高速道で富山に入ると突然の如く屋敷林が見える。他と比べて、砺波はウラジロガシが多い。関東平野や福島、小矢部もシラカシ。ユズリハは九州ほか全国にある。砺波にないものは、屋敷神。ないのが珍しい。屋敷内に何かを置いて信仰するもので、福島では大きい屋敷にはほとんどあり、全国的にも多い。砺波だけか？県内は？真宗と関係あるか？“特性”とは難しいが調査を要する。青森では県木にもなっているアスナロが砺波でも多い。建材となるが、福島ではケヤキはあるがアスナロはない。なぜか？砺波はとてつもなく大きい家屋敷がない。300～600坪が平均的で、3000坪超が少なく、それが地域景観となっている。屋敷林の景観は、全国に行き渡る政策が必要で、日本食のように誇るべきもの。関係省庁を引っ張り出して、景観として保全し、観光政策にも繋げる。安曇野市や大玉村など行政が景観として正面から向き合っているところもあり、ネットワークを創る。砺波がリーダーシップをとって、屋敷林サミットを開催し、景観観光を推進するとよい。人は来る!!屋敷林は、人を魅了する。鉢伏からの眺望も個人観光になる。…樽と桶に関する話も興味深く聞けて面白かった。

<出村忍;記>

今、カイニョから考える

柏樹直樹

長年カイニョを見てきて、「そんなに変化に目くじらを立てることもなかろう」と思う時もある。

しかし、多くは心配で不安で心の痛む事ばかりである。カイニョは、人が介在し使ってきた自然を利活用していく形である。その人のあり方と思考がすっかり変わった。極めて最近まで木の恩恵を心し人はカイニョの大小を問わず大事に扱ってきた。その象徴は「鎮守の森」である。そして、各家には神木とか家の歴史を語る木が必ずあって、その話が祖父から子・孫へと語り伝えられてきた。そして、カイニョは中心になる木と、それを支える沢山の大小木の「カタマリ」として、砺波の平均では1、300㎡ほどの敷地の3分の1は人が使い、まわりの3分の2は樹木のエリアにとすみわけ「自給自足」「共生・共存」の場としてきた。

その中の一員であった人は、いつの間にか勝手に自分だけで“生きよう”“生きられる”と、思いこむようになった。そして、情けないことに“楽”と“利便”を求め“自分だけが良ければ”の勝手を通そうと、智力の全てをそこにむける。かつて先人が大事にしてきた“一緒に生きる”“譲り合う”という、カイニョとの関係を否定し、カイニョは人が生きる上で不必要だと主張するところにまできた。これは人だけ“安ねい”に生きて、他の生物はどうなろうが関係ないという思考であり、地球という生物を破壊することに繋がる。行く行くは人自身が破滅する道であり、すでにそこへの警鐘は沢山の科学者・哲学者が色んな形で発信している。

しかし、人の「カネにこだわり」「楽を求め」「自分さえよければ」の思いは際限なく、カイニョは減退の道に追い込まれる。それが、この50年間のカイニョの告発である。

それに、焦眉のこととして「空き家」になったカイニョが増えてきたことである。人とカイニョが一体でこそ、本来の姿であり、事態は深刻でこれこそ市民全体の知恵が求められるところだ。砺波平野が元気で注目の存在であるためには、カイニョと一緒に形が元気で、そこに共生を楽しみ誇りとする人がしっかり生きていることである。約8千戸の散居のカイニョが今の倍の厚みになると全国いや世界から注目され、この砺波を訪ねる人々への最良の「土産」になるにちがいない。

今、市民・地域・企業が共同して考えることは、カイニョと共生する人になるための「努力」と「空き家」のカイニョ策で、そのための計画をねり50年・100年を見据えた哲学を踏まえた方針・指針をつくることである。

明治神宮の今の「杜」がどうしてもどんな過程でこれだけの形になったか。木の力、自然の力を借りながら、カイニョをつくり、生きるるとすごい市民の夢の場が作られる。その力を誘導し生かすのは人である。人が変ること、どうしても変われるか、真剣に考え総合的なプログラム・わくわくする市民の夢を創造する。急いでそれをやらねば、今少しある可能性の見本と心ある人が生きているうちにそこへの行政の今一番の集中行動が欲しい。まさに、ガンバレ市役所・ガンバレ市議会・である。

全て木から出発してみよう。木はじっとしていて動かないが、気付くと大きくなっている。

例えば、ハゼノキがあつという間に葉を広げ伸びあがる。

しかし、油断すると枝が枯れ、カイガラムシがつく。ゆったり生きているようだが、一途に生きる苦労を続ける。その木を人は使い世話になり助けてもらっている。木があるから人があるのだ。そこから考える“人づくりと施策”を練り上げよう。私の渾身の願いである。

――参加者募集――

安曇野で屋敷林フォーラム2017が開催

■日時：平成29年3月25日(土) PM1:30～5:00

■場所：安曇野市庁舎 4F ■内容：基調講演 緑の基本計画の紹介 佐々木(信大教授)
パネルディスカッション : 砺波・武蔵野・安曇野

24日に出発し、宿泊し、25日のフォーラム終了後、帰宅予定です。

参加希望の方は、事務局へご連絡下さい。